

琉球大学学術リポジトリ

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して：
アクティブ・ラーニングの先駆け

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2021-05-26 キーワード (Ja): アクティブ・ラーニング, 琉大ミュージカル, 学生主導型授業 キーワード (En): URGCC 作成者: 西本, 裕輝, 服部, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48508

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して —アクティブ・ラーニングの先駆け—

西本裕輝（グローバル教育支援機構）
服部洋一（教育学部）

要 旨

本稿は「ステージスタッフ総合活動」がプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞したことを契機として、その理由についてあらためて考察したものである。本講義は20年以上続いている「琉大ミュージカル」のための科目である。学生が自ら課題を発見し、自律的に行動し、問題を解決する学生主導型で展開されている。まさに本学が推進するURGCCにも合致しており、文科省がアクティブ・ラーニングという用語を発信するはるか以前から提供されている草分け的な科目である。その意味ではアクティブ・ラーニングの先駆けとなった講義と言える。

キーワード

アクティブ・ラーニング、URGCC、琉大ミュージカル、学生主導型授業

はじめに

本講義「ステージスタッフ総合活動」は、2020年度で22周年をむかえる「琉大ミュージカル」系科目である。服部教授が20年以上にわたって作り上げてきた講義であり、私（西本）はここ2～3年程度関わってきたにすぎない。

ただ関わって間もないという立場であるからこそ、本講義を冷静に、客観的に分析できるという側面もあるだろう。よって本稿では、主にファースト・オーサーである西本が、本講義がプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞した理由について、客観的立場から記述するものである。そうした方がかえって、服部教授が本講義について熱く語ることも、手前味噌という批判を退け、主観性を排除できると思われる。

ここではこうした立場から、本講義が行ってきた実践について記述したい。

1 明確な目標

まず本講義が他と決定的に違う点は、成果発表の場として「琉大ミュージカル」が設定されていることであろう。最終目標がミュージカルの開催、成功にあることにより、より目標が明確となっている。

また全体の目標があると同時に、個々人の目標も存在する。なぜならば、細かい役割分担が存在するからである。受講生は主に4つのグループに分かれていく。それがキャスト、オーケストラ、スタッフ、制作部である。

キャストは実際にステージに立ち、歌やダンス、演技を行い観客を魅了する。ミュージカルのメインストリームと言える。スポットライトを浴び、もっとも目立つ存在である。ただ当然のことではあるが、ミュージカルはキャストだけで成り立っているわけではない。

例えばオーケストラである。オーケストラは舞台上のシーンに合わせて生演奏を行う。ミュージカルは音楽の力なしに展開しえない。よって事実上のメインとも言える。なお、年によってはバンド編成となることもある。

また陰で支えるスタッフも重要である。舞台上のセットを製作したり、音響機材を使ってキャストの音を届けたり、照明でキャストや舞台を照らしたりする。スタッフは主に、道具の専門「転換班」、音の専門「音響班」、光の専門「照明班」に分かれる。

制作部は裏方としてもっとも重要なポジションと言える。それはとても系統的で効率的に組織されている。組織を示すと以下のようなになる。

- A. 統括
- B. 監督
- C. 舞台監督
- D. 音楽監督及び道具・美術
- E. 指揮者もしくはバンド・マスター
- F. 演出
- G. ダンス
- H. 歌唱指導
- I. 衣装・メイク
- J. 事務部（ジムズ）
 - a. 会計
 - b. 広報
 - c. 広告
 - d. 映像
 - e. 渉外

このように受講生たちは、ミュージカルの開催という全体の目標を持つと同時に、各々の役割に応じたそれぞれの目標を持つことになるのである。それは意欲の向上ややりがいに結びつくことにもなると考えられる。

2 URGCCに対応

こうした目標は、本学が推進するURGCCが掲げる目標とも合致している。あらためてシラバスに書かれている本講義の目標を確認すると次のようになっている。

- ・自らの課題を発見し、主体的に行動し解決することができる。【自律性】【問題解決力】
- ・仲間とのチームワークを大切にし、協調して課題に取り組むことができる。【社会性】【コ

コミュニケーション・スキル】

ミュージカルを開催するまでには、目の前にさまざまな困難が立ちまはる。成功させるにはそうした数々の困難を、仲間と協力しながら努力、創意工夫で乗り越えていく必要がある。自分は今何をしなければならないかを自分で発見し、解決していかなければならない。そうした体験を通して学生は大きく成長していく。そしてそうした経験は必ずや社会に出てから役立つことであろう。

こうして得られるものは、URGCCが掲げる「自律性」や「社会性」、そして「コミュニケーション・スキル」や「問題解決力」そのものであると言える。

3 アクティブ・ラーニングの先駆け

さらに本講義が他の講義と決定的に違うのは、こうした取組を本学がURGCCを推進するはるか以前、20年以上前から実践している点である。

もっと言えば、文科省が「アクティブ・ラーニング」を推進するはるか以前から、もしかするとその用語すら存在しないうちから、本講義ではすでにアクティブ・ラーニングと言える教育が実践されていた点である。文科省の定義ではアクティブ・ラーニングは「主体的・対話的で深い学び」とされている。まさに本講義が長年実践してきたことである。しかしアクティブ・ラーニングという用語が最初に中教審答申に登場するのは2012年のことである。

アクティブ・ラーニングという用語が登場する前の早い段階からそうした実践を取り入れてきたという意味で、本講義はURGCCの草分け的科目、アクティブ・ラーニングの先駆的科目と言っても言い過ぎではないだろう。

おわりに

以上で述べてきたことも関連していると思われるが、ありがたいことに本講義は毎年全学部から100名前後の受講生が登録する人気の講義である。また平成29年度、30年度とプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを連続受賞するということから判断しても、学生からの評価の高い講義である。

残念ながら服部教授は2020年度をもって定年退職され、本講義及び琉大ミュージカルの存続も危ぶまれるところである。しかし本講義の教育的意義は大きいと思われることから、今後も継続することができるよう、最善を尽くしたい。

<参考>

琉大ミュージカルHP

<https://ryudaimusicalkoho.wixsite.com/ryudaimusical> (2021年1月10日最終確認)